

第7回 本橋哲也著『映画で入門 カルチュラル・スタディーズ』

第3章 『亀も空を飛ぶ』監督バフマン・ゴバディ、2004年、イラク・イラン・フランス

☆増尾の意見疑問

・P59の新しい可能性とは何なのか。P66で述べられている予言（衛星放送など支配者からの情報）に頼らず自らの足で運命を切り開くということなのか。

・point3ではリガーとヘンゴウは「目」の重要性を象徴するとあった。イラク兵による暴行の末アグリが身籠ったリガーの眼が悪いという設定は、子どもとしての未来を奪われたアグリが自殺を考えるような「未来について思いを馳せることができない」（＝見えない）ことを表しているのではないだろうか。また、リガーとヘンゴウはまなざしだけではなく「何かを欠いている」者同士のつながりを持っているようにも感じた。

・p61 4段落「価値を展開しようとする子どもたちの沈黙のまなざしは絶望しか見出さないのか。」→幻想や夢を抱いていた子供たちが自らの現実を受け止めるということは「絶望」ともとれるが、一方で彼らが支配者から与えられるのではなく、自らの足で自らのアイデンティティを保ちながら歩くことができる点では「成長」ととることができるはず。

・赤い金魚や青い靴、青い長靴など色が強調される物が作品の中で重要な鍵になっていたように思う。砂埃の薄茶色の世界の中で物語が進んでいたように見えたからこそ、赤や青などはっきりとした色調のものが目に留まり、違和感を覚えた。現実(薄茶色の世界)にある幻想(はっきりとした色調)という異端なものを表現するために、色も作品に効果を与えていたように感じる。

・アグリが自由になるためには青い靴を脱ぐしかなかったのだろうか。身体の一部を失ったサテライトやヘンゴウは自らの人生を自己で築くだろう。アグリは自己の一部であったリガーを自ら葬ったことでサテライトたちのように生きていくことはできたのだろうか。

☆大下の意見疑問

・英題だと『亀も空を飛べる』になる。それぞれの登場人物が空を飛ぶには何が必要か。

・サテライトは子供たちをまとめるリーダーのような存在であった。ただ、なんとなく独裁的な気もしたのだが、どうだろうか。

・この映画において、予言は本当に希望なのだろうか。予言は希望的なものを含むから予言だと書いてあったが、本当にそうか？

・アグリを救ってみたい

↓以下、授業の内容↓

☆「子ども」とは何か？

記号的にいうと、大人でないものが子どもである。大人はいろいろな権力と力を持ち、子どもはそれを有しない。だからその間に従属関係が生まれ、大人と子どもに差ができる。

しかし、この映画では、子どもたちは子どもであるように描かれていたかは検討の余地がある。たとえば市場で銃を2丁買うシーン。貨幣とそれに準ずる価値のあるものがあれば、子どもも大人も対等に売買ができていた。これはなにか基準となるものが存在すれば対等な関係を築けるということが示されている例だろう。また、サテライトは英語を多少使用することができる。英語を理解できるように、テレビの前でただ座って映像を眺めるだけの大人たちとは別のコミュニティを作ることができる。大人の振るう権力の傘下に入らなくても自立ができるのだ。あるいは、大人と対等に渡り合えるような“英語”という権力を持っているのだともいえる。登場する教師がサテライトたちを子どもらしく扱う場面があったが、それに堂々と立ち向かう姿が描かれていたのは、彼らが自身の境遇なども相まって子どもでなくなっているためであろう。

#### ☆サテライトの統率能力

サテライトは独裁的ではない。彼は脱構築的な人物だ。クルド人の価値観を持ちながらも、アメリカの文明や機械を身につけている。

#### ☆サテライトはどこへ行くか

サテライトが最後のシーンからどこに行くかは開かれている。彼が子どもであることを続けるのであれば、ずっとアメリカに歯向かい続けるテロリストになってしまうが、大人になってしまうと都市に行き、クルド人のコミュニティは彼から置き去りにされてしまうだろう。

#### ☆予言の力

信憑性のうすい予言は、アメリカの文明と≒である。

#### ☆アグリンは救えるか

アグリンはなぜ死なねばならなかったのだろうか。この映画は最初に彼女が死に、その理由を追うようなミステリー形式であり、彼女の面においては閉じられた終わりである。また、この映画には彼女以外の女性が全く登場しない。舞台になった環境であるなら、そこに住む人の多くは女性であるだろう。それなのに老若男女どの女性も登場しないということは、それだけでこの映画は男性社会を描いていると言える。アグリンが死ぬしかなかった原因は、一部にこの影響もあるかもしれない。